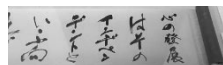


漱石の語 「模倣と独立」より



夏目漱石は書を好み、自身も江戸時代の良寛のような清澄な気分の書をよくしました。その評論のあり様とは私には異なった印象があります。本作では、日本語ではありますが、「白楽天詩二首」のような大ぶりで骨気の強い展開を意識して書いてみました。「方丈記より」との書風差を味わっていただければ幸いです。

陶淵明詩二首



中国の東晋から南朝・宗にかけて生きた陶淵明の著名な詩二首を小楷で書きました。陶淵明の時代にはまだ楷書は現在のような姿にまでは成熟していませんでした。当時の風を意識して書いています。字形が偏平気味で筆致に隸書の味わいを留めている様子が私には大変好ましく思えます。「臨鍾繇 小楷」と合わせてご覧いただけると幸いです。

窯変



窯変とは、周知のとおり製陶のことばで、窯の中における特異な焼成変化のことです。私はこの言葉が好ましく繰り返し書いています。自身の意図を超えて、筆鋒から意外なものが現れる様子が、思いもかけない釉薬の変色と重なり合うからです。会場では限度の大字表現を試みました。

模「万歳通天進帖」



これは、王羲之とその一族の筆跡がまとめて復元されている「万歳通天進帖」という資料があり、その原典と同じ「双鉤填墨」という詳細な技法を用いて再現を試みたものです。歴史的に「臨書」とは別に「模書」という分野があり、原典の書法を理解する上で有力な方法とされてきました。

臨 鍾繇・小楷



三国時代・魏の鍾繇は、能書として記録されてきましたが、伝来する書跡の信頼性をめぐって様々な見解がありました。近年、同時代の真跡資料が多く発見され、その書風の実在が確かなものとなりました。一連の鍾繇作品を、真跡の味わいを意識しながら臨書してみました。

しがだい資料展示コーナー企画展

Autograph

— 中村史朗の書 —

2023.1.10 [Tue.] – 6.30 [Fri.]

第Ⅰ期 2023.1.10 [Tue.] – 2.27 [Mon.]

古典に学ぶ
— 日々々の学書 —

第Ⅱ期 3.1 [Wed.] – 4.27 [Thu.]

近代の日中書法交流
— 研究と書作の間 —

第Ⅲ期 5.1 [Mon.] – 6.30 [Fri.]

シン・臨書
— 古法の再編成 —



第Ⅰ期 2023.1.10 [Tue.] - 2.27 [Mon.]

古典に学ぶ — 日々 の 学書 —

第Ⅰ期では、伝統的書法を基盤にして制作した作品を中心に展観しています。

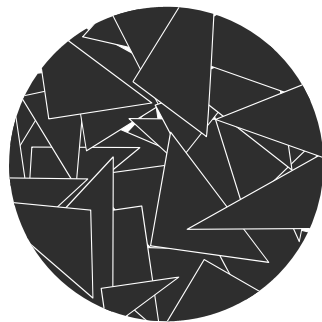
書にはおよそ三〇〇〇年の歴史がありますが、各時代を代表する名筆が生まれ、それらは時間の審判を受けながら「古典」としての地位を固めていきます。こうした古典の書法をよく観察して再現する学習法を「臨書」と呼びなわしています。どのような書作をめざすにしても臨書は常に学書の中核を占めてきました。

私は、これまで主に中国の古典の臨書に取り組んできました。今日の日本では、“そっくりに書く”ことが臨書の基本であるとする考え方が根強いようです。しかしながら対象によってはどのように書けばそっくりなのかわからないこともしばしばですし、歴史的名家の臨書を見ても原典に似ていないものも少なくありません。

つまるところ臨書においては書き手の対象への解釈が常に求められるのでしょう。

第Ⅰ期では、私なりに進めてきた臨書学習の成果の一部をお示ししました。ご高覧ご高批いただけましたら幸いです。

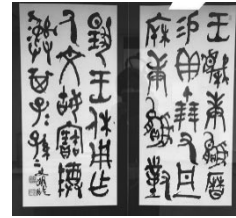
2023 年 1 月 10 日 中村史朗



Autograph

ギャラリートーク

第Ⅰ期 ... 2月15日(水)、第Ⅱ期 ... 3月10日(金)、第Ⅲ期 ... 5月16日(火)
いずれも 13:00 ~ 14:00



こうえいゆう
臨 康羸卣

三〇〇〇年近く昔の金属器の銘文を臨書した作品です。篆書という書体に属しますが、その後、秦の始皇帝が文字統一を行うまで、篆書は時期や地域によって様々な姿を見せます。本作では、拓本の文字の姿から想像をふくらませ、筆画に多様な表情を加えて書いてみました。



白楽天詩二首

草書という書体は、はじめ日常書写を効率化するために用いましたが、その後、書き手の心情を時間の推移に合わせて自在に表現するツールとしての役割を担うようになります。本作は、中国・唐代に隆盛した「狂草」という奔放な表現を取り入れてまとめています。近年は、この書風による作品を多く発表しています。



『性霊集の語』

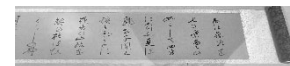
空海の語を、隸書という書体で書いています。二〇世紀以降、中国の辺境で漢の時代の肉筆資料が大量に収穫されます。約二〇〇〇年前の日常の書写実態が如実につかめるようになりました。その生動感を取り入れながら大字で大胆な表現を試みています。



神亀照心

神亀は、霊亀と同義で瑞祥とされる亀で、人心をよく察するといいます。行書による表現ですが、その書法の典型を確立したとされるのが中国・東晋期(四世紀)の王羲之です。本作は王羲之の骨格を生かしながら、後人の用筆の工夫に学びながら、率意を味わうようにまとめました。

『方丈記』より



昭和になって、「漢字の書」「仮名の書」に加えて、近現代の日本語を題材として扱う「漢字仮名交じりの書」(調和体)の領域が発展します。古典的な技法を反映させることが難しいですが、現代書の重要な部分と考え、さまざまな技法を試みてきました。本作は、王羲之の草書や日本の仮名書の表現を参照しながら、『方丈記』の著名な一段を書いてみました。